

イノベーションマネジメント

「移動」と「暮らし」を 進化させるオープンな 体制で研究開発を促進

自動車をはじめとするモビリティの世界が、ここ数年、大きく変化しており、Hondaはこの大きなうねりを、自らを変革するチャンスと捉えています。これまで、技術を自社開発することにより、ユニークな発想による独自技術・商品を生み出してきましたが、これは人を育てることも含めて、時間を必要とすることでした。変化の量とスピードが大きなこの時代、Hondaは、自らの強みを活かしながらも戦略的に外部の技術やビジネスアイデアを取り入れてさらなる発展をめざしていきます。具体的な例として、シンガポールのGrab Inc.との二輪車シェアリングに関する提携や、General Motors (GM)との燃料電池開発および生産の提携などがあげられます。今後も、Hondaの強みをさらに拡大・補完できるような提携をめざしていきます。

2017年1月には、米国で開催されたコンシューマ・エレクトロニクス分野における世界最大の見本市「CES (Consumer Electronics Show) 2017」に10年ぶりに出展しました。Hondaは、人工知能 (AI)、ビッグデータ、ロボティクスなど分野の垣根を越え、さまざまな技術やノウハウを持つ企業とオープンに連携すること、Hondaと外部の技術やアイデアを

融合し、新たな価値を生み出していくことを宣言しました。

このCES2017で、展示の中心を担った組織が「Honda R&D Innovations, Inc. (HISV)」です。Hondaは2000年から、米国シリコンバレーに研究拠点を設けており、今回はHISVが当地のスタートアップ企業やIT企業などとオープンに進めている共同研究の成果を発表しました。

また、米国のみならず、日本にもオープンな交流を目的とする研究拠点を設けたのが、「Honda イノベーション ラボ Tokyo」です。シリコンバレーも東京も、最先端の技術や文化の交流が盛んな都市であり、イノベーションを起こすには最適な環境であるとの考えからです。

さらに、2030年以降を目標に、人と協調する新たな価値を生み出すことをめざし、2017年2月に新たな研究組織を発足させたのが、「R&D センター X (エックス)」です。デジタルテクノロジーの進化が、Hondaに価値創造の可能性をもたらすものと捉え、「AI × Data × Hondaの強み」というコンセプトのもと、幅広いフィールドでイノベーションを起こすことにチャレンジしていきます。

一方、新しいものを生み出し、イノベーションを起こすには、ビジネスとの結び付きが重要と考え、本社内にあるビジネス開発を担う組織を大幅強化しました。これまで以上に、研究所と連携がとれるようにし、新しい価値の製品・サービスをより早く生み出せる体制も整えました。



CES2017 展示風景

TOPICS

東南アジアでの二輪車シェアリング協業

Hondaは東南アジアにおいて、四輪車や二輪車のシェアリング事業を行うGrab Inc.との協業の検討を2016年12月より開始しました。「モノ」の使用形態が「所有」から「共同利用」へと移り変わりつつあるなか、東南アジアの二輪車シェアリングの実現を両社でめざします。そして、都市部での渋滞緩和や環境・安全への取り組みを推進し、さらなる「安心・安全・便利」を提供していきます。

TOPICS

「Honda Riding Assist」が3つの賞を受賞

Honda Riding Assistが、CES2017において公式アワードパートナーであるEngadget※1が主催するBest of CES2017の「Best Innovation」および「Best Automotive Technology」を受賞しました。また、米国Popular Mechanics誌※2が主催するBest of CESの「Editors' Choice Awards」も受賞し、Honda Riding AssistはCES2017で合計3つの賞を受賞しました。

※1 多言語で展開されている、電化製品やガジェットの話題を扱うテクノロジーブログ。

※2 1902年に創刊された技術誌で、自動車、家屋、野外活動、科学、技術の記事を掲載。



Honda Riding Assist